

さざ波からうねりへ

関西個性化教育研究会会長 中井良興

本年度第12回目を迎えた夏季研修会を関西が引き受けることになり、7月30日、31日に、兵庫県の但東町で開催しました。

はじめは、兵庫県の中でも特に交通の便の悪い但東の地で開くことには躊躇しましたが、これを契機に今まで他の地域に遅れをとっていた「個性化教育」の取り組みを拡充することになればとの思いが強く、今回の研修会を引き受けることに踏み切りました。

幸いにもこの但東町は、偉大な教育者である東井義雄先生の生誕の地であり、教育実践を行われた地でもあります。個性化教育と東井先生の教育論とを重ねたところで、これからの新しい教育の方向をさぐる好機でもありました。

交通の便の悪い辺地での開催ということで、当初特に心配しておりました参加者も、北は青森県から南は長崎県と全国各地から250名余を教え、加えて、台湾からも台北教育視察団の47名を迎えての盛大な研修会となり、この教育の広がりを肌で感じました。

近年、関西地域にもオープンスペースを備えた新しい学校がどんどん建築されています。また、この度の大震災による被災校舎も数多く、その復旧工事が進行することによりさらに増えてくることが予想されます。しかし、残念なことに校舎は新しい様式に変わってもその中で行われる教育は旧態依然とした状態の学校が大半を占めていると言っても過言ではない状況下にあることも事実です。

こうした学校のオープン化にともない、まずその中で教育を行う教師自身の壁を開くことが必要です。そういう点からも関西で開催できたことは大変有意義であったと思っています。

私たちは、共通教材の考案や教師相互の学び合い、T・Tや総合学習の取り組みなどを進める中で、今までの教師主体の授業から児童・生

徒主体の学習への転換をはかりたいと考えています。

そのためには、個性化のためのシステム化された自主教材の作成や教科の枠を超えた学習の取り組みも欠かせないことですし、また、児童・生徒の学習自立を支えるためには、学習への取り組みを児童・生徒にゆだねることが大切になります。

教師は常に学習の支援者として、どうすれば児童・生徒が自ら学習に専念するかに意を配ることが必要になります。

このことは、「川は岸のために流れているのではない、川のために岸が作られているのである」と東井先生がいわれているとおり誰が学習の主体者かを明確にして取り組むべきだと思います。

個性に応じる多様な指導を創造するためには、教師が今までは通常と思っている考え方を改めることで、それは、教室での一斉指導が普通という考え方を改めて、教室だけでない新しい学習スペースを生かすことや学習時間を柔軟に考えること、学習適性に応じた多様な教材教具に配慮すること、1学級(教科)1担任制に代えて複数担任制の教師配置を考えることなど多様な学習形態を取り入れることが通常であることを考えることです。

幸いにも、個に応ずる多様な教育を推進するための教員加配の枠も年々増加している昨今です。

私たちの研究会も発足してから四年目を迎えました。まだまだ力量不足であることは否めませんが、この教育を進める仲間の輪を広げる努力を重ねることによって、やがては「大きなうねり」になることを確信し、この研究会を契機に更なる発展を期し精進したいと思っています。

第 1 2 回 全個教連夏季研修会

— 21世紀に向けての個性化教育のあり方をさぐる —

東井義雄先生の教育と個性化教育 — これからの学校建築と個性化教育

[期日]平成8年7月30日(火)・31日(水)

[会場]兵庫県出石郡但東町町民センター 他

7月30日(火) [第1日目]

講演①

「学校五日制と新教育課程」

国立教育研究所室長 高浦勝義先生

はじめに、従来の教育が大人の視点が強く、子どもの視点が弱いと指摘され、話を進められた。いままで学習指導要領が改訂されるたびに内容の精選がなされてきたが、教科に限定して言えば、教科区分なり内容を、科学・学問領域とその成果に求め、それぞれの内容を結論中心に(易から難へ、単純から複雑へ)編成するといった教科主義には、基本的な変更はなかったと過去の改訂の問題点を指摘された。

今後は、子どもの視点からの教育内容の質的改革を求める必要があるとされ、その基本原理を以下のように示された。

・内容決定における子ども参加 ・問題解決に基づく内容の単元編成 ・子どもの頭の統合性に基づく内容の統合的編成 ・子どもの発達の特性に沿った内容編成

第15期中教審の審議の過程で提案された総合的な学習も、この基本原理に基づく内容編成がみられなければ、単に今後の社会・時代では総合的な教科が必要であるからといって、大人中心、教科主義の発想から内容編成が進められるようならば、真なる新たな改革には通じないと言及された。最後に、総合的な学習は学習方法や指導の仕方の問題ではなく、子どもの視点に立った統合カリキュラム編成の問題であるとされた。子ども中心の教育課程編成の基本原理について大変勉強になる講演でした

(多田 信夫)

講演②

「これからの日本の教育」

高知大学教育学部教授 横山利弘

「体制は整った。後は個性化教育を日常の中でどのように具体化するのか、である。」

文部省の教科調査官をしておられた横山先生は、この夏季研修会の少し前に出された中央教育審議会の第一次答申を受けて、こんな言葉でお話を始められました。

「豊かな心を持ち、たくましく生きる子ども」とはどういう子どもなのか。今の子ども達は忙しく余裕が無い。そしていろいろな体験が足りない。そのために自分を見つめる時間が無い。自分から進んで何かをするという機会が無い。

この現状に対して私たち教師は何をするべきであるか。まず、体験を増やし自分で判断する機会を子ども達に与えてあげなければいけない。それは、子ども達に自由を与える、自由を認めるということである。これをしないでただ責任を問うことばかりをする場合が多いのではないか。責任とは自分で判断したことに対してとることであろう。

豊かな心とは、いきる力とは・・・等を我々がもっと具体的に考へなければ単なるスローガンで終わってしまう。これからの日本の教育を本当に「子ども達の自分探しの旅を助ける教育」にするために、

個性化教育を日々実践する私たちにとって、はっとさせられるような言葉が随所にあり、自分を振り返りながらお話をお聞きしていたせいか1時間の講演がとても短く感じました。体制が整ったからこそ、これからの私たちの本当の勝負の時であると改めて感じました。そしてそのためのすばらしい示唆をいただいた気がしました。(安達 幸)

学校参観

但東町立合橋小学校・出石町立弘道小学校
出石郡但東町立高橋小学校

午前の講演に続き、町ぐるみで、個性化教育に取り組んでいる但東町と出石町の学校を参観した。

合橋小学校の特徴は、一言でいって、子供と教師の生活の場の構築といえるだろう。特別教室も含めて各教室は、内装の色、備品、部材、照明など細かいところに至るまで、そこで生活する教師と子供のことを考えて設計されていた。1日の大半をそこで過ごす子供と教師にとって、学校は単なる建物ではないはずである。生活の場としての学校という印象を受けた。

弘道小学校は、歴史の町としての出石町の景観に合わせて、木の暖かみを生かした木造校舎であった。設計者が、子供の生活をつぶさに記録し、そこから、校舎がどのようにあるべきかを考えて設計したので、とても生活のにおいをする建築である。どの教室からも屋外に出ることができなのが、特徴的であった。

高橋小学校は、地域コミュニティーの場としての機能も持ち合わせている校舎で、地域住民の会合に使える部屋が備えられており、雪が多

いという自然環境を考えて、建物に雪対策が講じられていたりもする。もちろん合橋や弘道小と同様、そこで生活する子供や教師のことを考えて、採光や設備、内装面も設計されていた。

当日は以上の3つの学校を参観したが、いずれの学校も、それぞれの地域の特徴を生かしつつ学校で生活する子供や教師、さらには地域住民のことを考えて設計されていることが伺い知れた。(中田 泰志)



7月31日(水) [第2日目] 分科会

《A分科会》 「T.T.をどのように進めるか」
(提案1) 吉澤 千鶴子先生(東京・根岸小)

子供の側に立った学習方法の一つとしてT.T.をとらえ、実践例が紹介された。また、T.T.をより効果的に進めるために次の3点が示された。

- ① 年間計画の作成
- ② T.T.実施を考えた時間割の工夫
- ③ 校内研究の活用

(提案2) 加藤 幸子先生(兵庫・合橋小)
実践例として、単学級でのT.T.や異学年交流のT.T.の生活科の例などが出された。

T.T.ではT1, T2…の情報交換が大切で、次時はどういう点で子供を観ていくか話し合っているとのことだった。

(提案3) 垣尾 幸博先生(兵庫・和田山中)
英語・数学・技術家庭科での実践例が紹介された。

T.T.では人間関係が大切であるが、お互いの力量を高め、得意な分野で力を発揮できればよいのではないかとのことだった。

(T.T.の利点と課題) ○利点 ●課題

- 個人差に応じた指導ができる。
- 多様な学習形態をとることができる。
- 多面的に児童を観ることができ、児童理解が深まる。
- 教師の個性や持ち味を生かすことができる。
- 計画、準備、評価等共通理解を図るのに多くの時間が必要だが、その時間がとりにく

い。

(助言) 奈須 正裕先生(神奈川大助教授)

- ・T.T.の論理は、子育ての論理と似ている。
→一人でみるより、複数でみる方が効果的。
- ・「T.T.を効果的に進める」というより、「どのような形が自然か」と考える方がよい。
- ・教師個々の力量でなく、集団としての力量
→教育の一貫性→学校づくりをみんなで考える
→指導と経営の一体化 (五十子 晴美)

《B分科会》 「総合学習を考える」

「どんな力を持った子を育てるかをしっかりと持ち、可能な限り、この子にどう即していかるか、まずやってみましょう。」という力強い成田先生の助言を受けたB分科会では、3校の実践発表があり、130名参加した。

まず、二井先生より明石小学校における「総合学習のルーツ」について説明があった。大正13年の欧米使節以来従来の教科本位を指導の生活本位に改めた。及川平治先生の「分団式動的教育」の事例(題目-観光都市としての明石市の研究 昭和8年)以来、常に子供に即したカリキュラムをめざし、現在は教科内総合学習(国語科単元学習-言語的創造能力を養う)の試行に至っているという報告があったり、たゆみない研究の深さを感じた。

大磯小学校からは今日的課題等を含む学習活動として総合をとらえ、カリキュラムを再編成して、年間15時間を確保し、T.T.で取り組まれた、6年生の「人に、地球に優しい21世紀にしよう」という実践報告が河合先生よりなされた。子供たちが自分たちで問題意識を持ち、課題を解決してゆく過程でそれぞれに成果を上げ、伸びていく反面、対応する教師側の課題(評価・共通理解・対応能力)が大きい点が挙げられ、質疑応答でも話し合われた。

中学校からは、教師一人が1講座を持つ、「選択教科」を生徒がより自己教育力をつけられるため、個性を生かした学び方ができていくためにどう構成していったらよいか、川尾先生かた生徒の動きをていねいに追った実践発表(サッカー、地球を開拓等)があった。生徒の感想にもある通り、満足した自己評価能力はより高い自己教育力を育成できるであろう。次年度の講座が待ち遠しく感じられた。

異質性への抵抗が強く、異なる学習はできない、時間がないという恐れを持っている現場において、実践を育てる力を持ち、話し合い広げていく生き方を教師自身ができるかどうか、参加者は助言を己に問い返ししながらそれぞれ、帰路に着いたのではなかろうか。

(加藤久美子)

《C分科会》「大震災に学ぶ これからの学校建築を考える」

坂本直義建築士から学校を地域のコミュニティーセンターとして再認識をする必要があるという提案がなされた。これからの学校施設としては、個性化教育施設・生涯学習施設・避難防災施設など含んだ特別施設の合体ではなく、施設全体に柔軟なフレキシビリティを持たせる必要があると提案された。また、このような学校を作るとき、現場の先生がこういう施設が欲しいという願いを設計士に伝えることの重要性をいわれた。さらに総合的なプロデュースを行うシステムの必要性もいわれた。

次に田結庄良昭先生（神戸大学教授）から、学校が一番安全な公共施設であるという暗黙の理解があるが、神戸では学校が一番危ない土地（地下水位が高い・人口改変地盤など）に建てていた。避難所である学校が倒れない建築で、地域コミュニティー・防災のセンターとして、井戸や地震計などを設置することを提言された。

最後に上野淳先生（都立大学教授）から、大震災における学校の状況報告がなされた。構造的被害はあったが、原形を保っていた。学校建築はよく頑張っていた。しかし、二次災害の被害が大きくなった可能性があった。また、昭和30年代に建てた学校は危険である。

さらに、学校が避難所になるのは必然性があるが、何でも学校に持ち込んでいいのかということ、どこを目標にし、何をするのかを明確にする必要がある。また、教職員の存在が大きかったが、マニュアルと権限・役割が明確化が必要である。

オープン・スクールの安全性や学校建築にどう関わればよいのかなどの質問が出された。これに対し、新耐震構造で構造上に壁があるかないかは関係ない。窓ガラスはアルミサッシ枠の問題である。教職員は言葉ではなく具体的な形で設計し示す必要がある。

神戸市教育委員会委員長の坂本邦夫先生より、先生方の意識を高める必要性・神戸市の今後の改築の方向や学校用の震災マニュアルが作成されたことが報告された。（加藤 勇）

○パネルディスカッション

井上和昌先生（白もくれんの会・常任理事）より東井先生の元での実践を細かく報告された。そして、子供達を主体者・形成者になった教育や「させる立場」から「する立場」に立たせる

ことが教育の原点であり、子ども達の生活の論理と教科の論理の止揚する必要性を述べられた。この際、子どもがどう教材に切り込んでも、学習の方向を考えられる力量や子どもの言葉を聞く耳など教師のいきさまが教師の技術であると述べられた。これを受け、加藤幸次先生（上智大学教授）は、東井先生の実践をどう歴史の中で位置付けるか。子供には考える前に育つ世界がある。現在の新しい条件のもとでプログラムを組む必要がある。いい教育はインターナショナルでなければならないと話された。鈴木正幸先生（神戸大学教授）は、東井先生の詩を読み、「感度のよい授業」の必要性と「聞く耳」と「聴く耳」の違いを話された。

そして、井上先生は「それぞれの子どもが光る学校」が大切である。加藤先生はこれらのことをするために、具体論をどうするかが問題となり、プログラム化することが必要になってくる。個別の課題を作りながら、追及の仕方を作っていくことである。個性化・個別化はプログラムであり、これを行うためにも、教師の見とりが大切になる。単元や題材を別け、分析的に見て学習形態や学習集団などを考えていく必要があると述べられた。

井上先生は今いわれている「新しい学力」とは「真の学力」であり、東井先生のいわれていたものである。最後に、鈴木先生の「どんなに強固で正しいと思っても、それは（子どもに）押しつけることはできない」という東井先生の言葉で、この会が終わりになった。（加藤 勇）

山口個性化教育研究会発足

副会長の永池先生が山口に帰って来られたのを機に、8月19日、西の京“山口”に山口個性化教育研究会が発足しました。当日は加藤先生もわざわざ山口によって下さって発足に花を添えて下さいました。今後はオリンピックではないけれど、4年後に“山口で夏季研修会をひらきたいね”を合言葉に、会員4名心一つにして、がんばっていきましょうと思います。（三原 典子）

全国個性化教育研究連盟会報 第37号

平成8年9月29日発行

編集責任者 事務部長 高浦 勝義
編集 広報部 グループ 埼玉

（事務局への問い合わせ・連絡先）

〒114 東京都北区赤羽南 1-16-2-504

03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和